

# ヘンタイ MC Ojisan

私達  
ヘンタイに  
されました

MC/洗脳/寝取られ/寝取り  
常識書き換え/感情操作  
バリキャリ/ピッチ化/  
悪堕ち/連鎖堕ち/人妻  
MILF/強い女性/乱交  
マルチヒロイン/

動くオンナ達編

Circle  
w (H) ドリアヌ

高く  
く。れに  
な姿。

高め  
ション  
イナー

セクシー  
エリー特  
ロかわ

キ

He  
M

社会  
大才  
おア  
戦曲

# ==Story Outline==

ストーリー概要

冴えない四十路おじさんが与えられたもの。  
それは**上級国民のためのショーの舞台**だった。

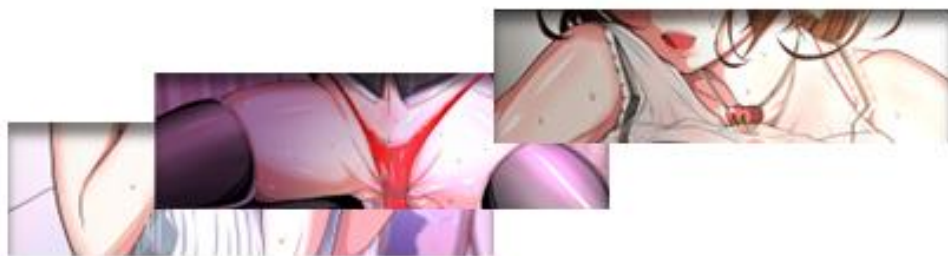
うだつの上がない清掃員の四十路おじさん、  
塩豚太(しおぶた ふとし)は世間を憎みながらパツとしない  
日々を送っていた。そんな中年男の憎しみはふとしたきっ  
かけによって覚醒する。四十路おやじが**上級国民**に与えられた  
のは**洗脳装置のついたエレベーター**がある一等地のオフィ  
スビルと**上級国民のために女達を教育**するという任務だっ



四十路おやじの世間への鬱憤が都会の真ん中で胸を張つ  
て働く**デキる女達**へと向かう。MCエレベーターによって**勝  
ち組の女達**は都合のいい性の道具へと成り下がっていく。



**暴走する墮落した性の宴**はどこへ向かうのか。



# Hentai MOC Ojisan

意識は高く  
頭は低く。  
おしゃれに  
エッチな姿。

意識高め  
ファッション  
デザイナー

最先端セクシー  
ランジェリー特集  
春のエロかわコーデ

できる  
オンナの  
ゆるふわキャリア!



# 一ニテザイン事務所新人編：錦ホシノ



俺の名は塩豚太(しおぶた ふとし)。肥満体を作業服に押し込んで今日も今日とてバイトに勤しむ中年男性だ。ここは東京駅前、丸の内の高層ビル。高層階には高級レストラン、低層階にはコンビニ、そしてその間の数十階は今をときめく企業の洒落たオフィス。控えめに言っておく俺の存在は場違いだ。自分でもわかる。

通り過ぎる男女は高級スーツやファッションナブルな装いで多分俺の月給と同じくらいのを着ている。莫な格差社会なのは間違いないねえ。

そんなことをぼーっと思いながらドアの手すりを拭く。「ロナだとかでいちいち取手を消毒とか正気じゃない。そんなことを思っていると不意に扉が開いて俺の頭を打ち付けてくる。

「おい、気をつけろ、おつれど」

俺より二十は年下の茶髪にワックスマシマシの若者が連れの女と俺を嘲笑っていく。糞、頭ぶつけたのはこっちなのになんで怒られなきゃいけないんだよ。

「あーいうふうにはなりたくないよな。アレー生清掃のバイト止まりだぜ」

「もーそーいう風に言っちゃだめなんですよー」

連れの二十代前半のふんわりした八部丈のパンツに白いカーディガンを羽織った甘えた顔立ちの女がクスクス笑いながら注意する。というかその口調は注意する体をとりながら一緒に俺の嘲笑してやがるな。糞メスが。こーいう事があるから昼間の仕事はイラつく。

俺は今しがた頭をぶつけたドアを確認する。Neo Avant-garde design Inc. ねおあばんどがーどでわいん…？ たぶん、デザイン会社だ。あーいう調子に乗った若者がいかにも調子に乗ってビジネスだコンプライ

アンスだなんだと横文字を並べながらふんぞりがえっていそいな会社だ。とりあえずその磨き上げられた金属製の扉をケータイのカメラで撮る。イライラをぶつけるように適当に切り上げる。まったく、やってられねえ。

そのまま俺は汚い業務用エレベーターに乗って屋上のペントハウスに向かう。いらつくことがあったから今日の勤務は終了だ。やつてられん。

普通清掃員は深夜に入る。オフィスにとって俺みたいな汚い連中は視界に入れるのも嫌だつてわけだ。ま、実際今日のような不快な思いをすることも少なくともないからある意味清掃員にとっても夜のほうが気楽でいい側面もある。実際はめちやくちや広いビルの清掃はかなり忙しいんだが…。

そんな胸糞悪い昼の勤務を俺が選んでいるのには理由がある。

使用人用の小汚いエレベーターをでると掃除道具が置いてある倉庫だ。そしてその倉庫のドアを開けるとピカピカでモダンな鏡面仕上げの廊下だ。その突き当りの両開きのドアを開ける。

ヤっつきまで卑屈に丸まっていた背中が伸びるのを感じる。豪華なペントハウスには似合わない作業着がどこか心地いい。扉を開けると巨大な石と鉄のデスクが目につく。デスクの上に置かれた黒い石のネームプレートには『四十路清掃株式会社 社長代理 黒石シキナ』と金箔押しで書かれている。できるだけダサそうな名前をつけてやったのにこうして置かれると様になるから苛立つ。

「ご主人様、今日も清掃を終わらせられなかったのかな?」



ピカピカのデスクに座ってカタカタキーボードを打っていた女がこっちに向いてそうこともなげにいう。その相変わらず偉そうな態度にイラツと来るが、どうせこいつもメスだと思ひ直す。

白いタイトスーツにグレーのジャケット。胸元が大きく開いた挑発的な赤いカットソーが嫌が応にもその女の自負心を強調している。

俺が近づくと立ち上がって椅子を譲る。下半身を強調するような金色のベルトのバックルは純金だ。同時に机の上のネームプレートをひっくり返す。新しい面には『四十路清掃株式会社 社長 塩豚 太』と箔押しされている。

「この会社の奴らが俺をバカにしたんだ」

トスンと椅子に座りながらさつきケータイで写メったのを見せる。俺のサイズにあわせてある椅子は快適そのものだ。

「まったく仕方ない人なんだから…」

そっぴいなながら横でパソコンを操作して該当企業の社員名簿を開くシキナ。かがむとちよつどプリツとしたケツが突き出されてエロい。やっぱりコイツはエロい女だ。

「アバンギャルドデザイン株式会社ね」

俺の写真をそう読んで検索するシキナにイラつときて形の良い尻を揉んでやる。

「あんっ…ふ、どれっ」

気の強そうな表情とは真逆に俺のセクハラを受け入れ、社員のリストを呼び出す。このビルのオフィス部分には入館証がなければ入れず、入館証には顔写真が入っているため会社さえわかれば顔から個人を特定できるってわけだ。

ぞんざいにケツを揉みながらリストからなつきの顔を探しつつなつきの経緯を説明する。

「ん…くう…それはいけないですね。とつても失礼だね…んっふうっ」

そういうシキナ自体がかつてなら俺のことなど歯牙にもかけなかっただろう。だが、シキナはこの国の暗部と対立し敗北した。俺はたまたま運良くシキナとこのオフィスの管理を任されることになった。従業員を洗脳支配する邪悪なこのオフィスの管理を！

「ふん、お前もずいぶん失礼だったくせにな」

「んっ…その事は言わないですよ。私がバカだったんだからあ…」





くねくねとケツを浮かせて媚びるシキナ。俺がダメであればあるほど好きになり、甘やかしたくなるように『調整』済みの彼女がせつなそうな声を漏らす。本来のシキナは競争心旺盛で強い性格だが、俺に惚れさせることで牙を抜かれた形になっている。このビル自体が俺を甘やかしたためにする装置である以上、俺というダメ人間を愛するようにしつけられたシキナは俺を甘やかすために俺の犬となる。

『無能でいるバニー！ そしたらおごぼれにあずかれるバニーね！』『そう俺にこのビルを預けたやつは言った。薄気味悪い着ぐるみを着ている男だった。』

『有能な人間より無能な人間であれ』

それがこのビルの隠れたモットーだ。ケツをくねらせるシキナがそのシンボルだ。毎日ジムに通って完璧なボディバランスを俺のために維持しているこの女は有能だったがゆえに戦って敗北し、無能な俺のモノとなった。

「ふひっ、「コイツとコイツだよ。俺を嘲笑ったのは」

画面上に先程の二人の個人情報映る。

「ふーん、まずはお仕置きしなきゃいけないかなあ…んふっ」

発情したような甘い声でシキナがささやく。いや、実際発情しているのだ。『敵』を与えられてシキナの残酷な闘争心に火がつく。かつて正義の為に戦っていた闘争心が俺というクズのために弱い者いじめに向かう。

「女の子の方は新卒で入ったばかりだね。磨けば光りそう。男の方はプロジェクトマネージャーで新人教育係かな」

そう言いながらシキナは体をオレに寄せ、ケツで俺の股間をスリスリする。高級なパンツスーツ越しにむっちりとしたケツがズボン越しに俺を挑発する。

「まっ、悪口ぐらいいだからちよっと恥をかくくらいで許してあげようかな」

そう言っって冷たく笑うシキナ。

俺はニヤニヤこれからのことを妄想しながらシキナに二人に仕込んでいく暗示内容をささやく。ついこの間まで俺はパソコンのモニタ上で運命を変えられるのをビクビクしながら怯えているだけだった。いまや他人の人生をモニタ上で支配する側だ。シキナのエロいケツがなくてもいきり立つシチュエーションだろう？ひひひっと思わず汚い笑いが溢れる。

日が傾き始めたころ、二人を呼び出す。

ほとんどの人間が存在すら知らない最上階のペントハウス。そこにいきなり呼び出されてビクビクする二人。このオフィスのエレベーターは巨



大な洗脳装置になっている。もちろん監視装置も満載だ。

「なんかやらかしたんじゃないよな」

「そんなあゝ、あたしぜんぜん心当たりないですよ」

そんな会話をしている二人の無意識に俺の『催眠暗示』が刷り込まれていく。

そして催眠エレベーターから降りた二人をシキナが案内する。

「こちらでご主人様がお待ちです」

スラリと格好いいシキナが言えば、『ご主人様』という言葉さえも特別なブランドのように聞こえるから不思議だ。

昼間俺をバカにした二人が入ってくる。日が暮れて、俺の背後の窓にはきらびやかな都心の夜景が輝いている。すこし暗めな室内に入って二人の目が大きくに驚きく開く。

「黒石インバستمント顧問及び四十路清掃株式会社代表塩豚太様です」

冷たくあざ笑うようにシキナが言つて俺に目配せする。

「ふひひ、昼間は世話になつたな」

俺がそついう。

「え…昼間…」

男のほうは何のことかわからない顔をする。全くイラつく。記憶にすら残っていないとは。

「ホラ、先輩…あの掃除のおじさんですよ」

「…そこそ女のほうが目打ちする。

「え…あ、すみませんしたー！」

一瞬で理解して土下座するような勢いで頭を下げる。昼間あんなにバカにされていて、しかもバカにしていた事自体を忘れていたくせに。大した変わり身だ。

「いやいや、口先だけの謝罪なんていらんか  
らね。』本心』でどう思っているか教えてよ」



埋め込んだ催眠暗示のキーワードを口にする。これで二人は絶対に嘘は言えない。

「え、ありえねーだろ。あんなとこにいてなんかの良だよ。誰だよ、オレをハメたやつ？つーかコイツが黒石インバストメントの顧問、ウソだろう？！ ただのくっせーおっさんじゃねーか」

そう大声で言う。次の瞬間、笑えるほどに慌てた表情で口を抑える。

「ふーん、そつちの女の子はカワイイねえ。自己紹介とその失礼なガキの紹介、それから二人の関係を『本心』でお願いできるかな」

「このセクハラ野郎！ ふざけん…」

男が一步前に出て怒鳴り始めた瞬間、シキナがピシヤリと言う。

「静かにしなさい」

その瞬間、その男が黙る。本人自身が口を閉じてしまったことに驚愕している。二つ目の暗示はシキナの命令には絶対服従だ。

「ホシノさん、自己紹介をしなさい」

シキナの声が二人の背後から静かにする。

「あ、あの…錦ホシノと申します。アバンギャルドデザインに先月入ったばかりの新人です。こちらは弊社のプロジェクトマネージャーの三河原ケンと申します。ケン先輩は自信過剰でうざったいですが実績は確かなので公私共にご指導いただいています」

「へー、プライベートでも会ってるんだ、ホシノちゃん」

「はい、先輩には彼女がいるので秘密ですが…」

「おい、それは秘密だろ！」

へー可愛い顔して奪う気満々ってわけだ。なかなかクズな感じで競争社会生き残りそうじゃん、ホシノちゃん。

「つで、ケンだっけ？君は何股かけてるの？」

この少しのやり取りだけで嘘がつかないことを飲み込んだらしく男の方は口を閉ざしてオレを睨んでくる。

「ケン、言いなかつ」

シキナの命令が飛んで、嫌がりながらも口を開く。



「よ、よん…股…」

想定より多かつたらしくホシノちゃんが先輩の方を振り向く。

「え…誰、誰ですか！ あと一人！」

なるほど、ホシノちゃんは3股までは把握していたと。中々ドロドロしてるねえ。さすがイケイケのイケメンだ。食べ散らかしてるわけだ。

「ふーん、中々のクズっぷりだね。ホラ、セフレの疑問に答えるのも先輩の仕事じゃないかな、ケン先輩」

シキナがクスクス皮肉る。

「取引先のアーバンテレビのプロデューサー」

うーん、社内のドロドロが社外に飛び火したね。超スキャンダル。

「え…じゃあアーバンテレビの受注は…」

秘密を知ったホシノちゃんの呆れ顔も中々カワイイね。

「ホシノさん、太様のところに行つてカーディガンを脱ぎなさい。触られても抵抗しちゃうだめだからね。ケンはここにステイだよ」

シキナの指示に従うホシノちゃん。ちなみに顔はすごい嫌そつだ。

「おい、ホシノに触るんじゃないねえーよ、クズが」

うーん、君も中々のクズっぷりだったけどね。

先輩が口だけ抵抗する中、小柄なホシノちゃんがこっちに来る。春っぽい淡い色合いのふつくらしたズボンにカーディガン。リボンベルトがまるでオマンコのラッピングみたいだね。かすかに香る甘い匂いは香水なのかシヤンプーなのかな。薄いカーディガンを脱ぐと白い肩が露出する。ウエーブのかかった明るい茶髪がいかにもな感じだね。

「触ったらただじゃおかねーぞ、クズバイトのくせにー！」

ケン先輩(笑)の罵り声をBGMにホシノちゃんを抱きしめる。うなじから香る若いメスの匂いが最高にそそるね。

「やめてくださいー！」

ホシノちゃんがいうのを無視してホワイトのシヤツ越しに胸を揉む。でかい、ケン先輩が味見したくなるわけだ。





「ヒヒヒ、大きいねえ、何カップなのか教えてよ」

「んん、でい、ディーカップう…やめ、やめてくだわい」

「汚ねえ指をどけろや、エロオヤジが！」

ゆっくりとホシノちゃんのおっぱいを揉みしだく。中々重量感があって肩がこりそうな巨乳だね。マシユマシユみたいに柔らかくて甘い香りも最高だよ。こんなの歩くセックスシンボルじゃないかな。

「ホシノちゃんの男性経験を教えてよ、ヒヒヒ」

「ふう…ケン先輩でえ、二人目ですう。インターンで、んつくう…ケン先輩と出会ってえ、初カレと別れましたあ。っんん…しゅ、就職成功したいからあ…」

思ったより経験少ないんだね。そしてインターンの時に味見されてたってわけだ。

ケン先輩に見せつけるようにホシノちゃんのシャツをたくし上げてデカパイの上に乗っける。上品な色合いのブラを外すと入社したての乳首が覗く。すでに可愛らしくちよっと勃起している。

「おい、掃除のおっさんのくせに。ぜってー訴えてやるからな。

お前の人生終わらせてやる！

セクハラ野郎が、キモいんだよ」

喚き散らしている先輩は徐々にホシノちゃんの抵抗が弱まっていることに気がついていないみたいだね。ホシノちゃんの三つ目の仕掛けはケン先輩が俺のことを悪く言えはいいほど俺のことを敬愛するようになっているってことだ。ふひひ、先輩はすごいぶん口汚く俺のことを罵り続けてくれるからね、ホシノちゃんの抵抗もそりゃ弱まるってわけだ。

キュツとカーディガンとおそろいの乳首を潰す。すぐにちよつと硬くなってきたのかな。

「ひゃあ…」

口をついて出た声に本人が恥ずかしそうに赤面する。

「おい…ホシノ…なんだよ」

「ち、違うのお…んっぶうう」

おやおや、嘘は良くないね。正直に言えるようにしてあげなきゃね、ふひひ。

「ホシノちゃん、感じてるんだよね？」



クニクニと可愛らしく勃起した乳首を「ねへり回す。必死で我慢するホシノちゃんもカワイイね。

「やめろよ。ハゲ親父のくせに俺のホシノに触るんじゃないねえ」

『俺の』(笑)、四股しておいて。

「ホシノさん、答えて」

シキナの命令が飛び。

「あああ…か、感じてますう…んん！ いたくないのお…んぶう」

言いたくないって言い訳の抵抗はセクハラに対してより上司への体面の意味が大きいのかな。じゃあ、そっから自由になってもらおうかな。

ホシノちゃんの柔らかいもち肌を指先でなぞりつつシキナに目配せする。

「ケン、あなたには解雇通知書が届いているわね」

「え…」

絶望した顔のイケメン。この瞬間が最高に生きててよかったって気がするね。シキナがぺらい紙を押し付ける。

「読み上げなさい」

シキナの無慈悲な命令が響く。

「はっ…」

唇を噛んで抵抗するのも一瞬しかもたない。機械的に読み上げ始める。シキナが手回しして準備させたものだ。

「かつ…解雇通知書。○年○月○日、三河原ケン殿。アバンギャルドデザイン株式会社」

その一方でホシノちゃんの体が興奮に染まってくる。熱を帯びた肌にじんわりと汗が浮かんで、漏れる息遣いが甘くなってきた。この場の誰が勝者かわかってきちゃったかな。

「と、当社は貴殿を下記の事由によって解雇いたします」

「ふう…んっ、そ…お…」

薄い布越しに股間に触れると湿った感触がある。震えながらも快感に素直になる新卒の体。お



っばいは大きいのにちっちゃい体がおじさんのチンポに響くねえ。

「解雇日、○月○日。なお、解雇日まではペントハウス倉庫勤務とする」

「あつ…つ…つ…んん…ふう…だめなんですよ…」

「解雇事由…、う…取引先との不貞行為および利益相反。社内で複数人と…不貞行為を行い、セクシャルハラメントを行ったため」

と…と…と…抵抗しながらも読み上げるプロジェクトマネージャー。無情にもそれを聞きながらホシノちゃんの体は徐々に性的な匂いを増していへ。

「んん…ふう…あつ…はあ…」

「なんでこんなクズオヤジにいい…」

その声を聞きながらホシノちゃんのおこをクイッとあげる。すぐに察して彼女の方から唇が重なってくる。

「ちゅっ…ちゅ…ぶ…んちゅっ…んふう♥」

まだなれているとは言い難いフレンチキス。でも、だからこそ彼女の経験人数の正しさを裏付けている。

「おい、ホシノ…なんでそんな奴にキスしてるんだよー！」

「んふう…ちゆる…れるおお…んふうう…ちゅぷぷぷぷ」

解雇が決まった哀れなプロジェクトマネージャーの声を無視してキスを続ける。うなじ越しにふわりと鼻をくすぐるフェロモン。デザイン会社の若くておしゃやかな女性社員が作業着のおっさんにキスをねだる。チロチロと小さい舌が子犬のように俺の舌に絡みついてきて、俺の汚れた上着に彼女のデカチチがこすれる。彼女の白い指が俺の背中を抱きしめる。

「つぷはああ…♥…」

キスが終わると彼女の俺に対する眼差しは昼間とは全く違うものになっていた。かすかに潤んだ瞳。頬を赤らめて必死でこびようとしている。依存できる相手に出会ったような忘我的な表情だ。

「三人目がこんなおっさんでごめんね、トコト」

「いいんです。塩豚さんなら、わたし、こうです」



そう言つてホシノちゃんは自分からおまんこをフリッピングしているかのようにリボンベルトを解く。ふわりと柔らかい布が床に落ちる。上品なパンティ。

俺は彼女の腰を抱いて応接スペースのソファに向ける。白い指がサンダルを脱ぎ捨てる。

「おい、ホシノ！ お前、何だよ！ ビッチが！」

もうすぐ無職になる男の絶叫に彼女は耳を傾けない。まるで俺しか見えないかのような振る舞い。

視界の外でシキナの命令が聞こえる。

「ケン、ちよつと黙ろうか。そこで座つて顔を上に向けて。そうそう。うるさい口は開けっ放しにして舌で私のオマンコをクンニだよて。ご主人様とホシノちゃんのエッチの鑑賞中クンニし続けなよ。クスッ解雇日までの三十日でちゃんとしつけてあげるからね」

夜景をバックにしたソファに腰掛ける。目の前には上半身はだけでパンティだけになったホシノちゃん。淡いパステルカラーのマニキュアで彩られた指が宝石箱を開けるように優しく俺のベルトを外し、丁寧に肥満体の中年オヤジのちんぽを露出させる。

「ホシノちゃん、今の『本心』を聞かせてよ、うひっ」

期待に変な声が止まらない。

「えっと、太さんに出会えてとってもドキドキしています。最初にあったときはあんまり良い印象はなかったんですけど、今晚お話できて百八十度印象が変わりました。太さんみたいな男らしくて、魅力的で信頼できる人であったことありませんでした」

今までの経緯にそんな要素一つもなかった気がするけど、この数十分の出来事は彼女にとっては完全にそういう記憶に書き換えられてしまっているね。

「太さん、どうか私を指導してくださいませんか」

彼女がパンティを脱ぎ捨てる。あくまでも受け身を装いながらふんわりとフェミニンな体をくねらせて俺を誘う。

「ふひひ、一生バイト止まりのちんぽを突っ込むよ」

「あ、んん！ ひつどいんですからああ♥」

昼間俺に投げかけられた言葉をそのまま投げ返しながら若い体を押し倒す。サラサラしたうなじ





に鼻を突つ込みながら発情したメスの割れ目に欲望を押し込む。温かいヒダが亀頭に媚びるように絡みついてくる。

受け身を装いながらもすっかり濡れてるんだね。

「はっ……んっくっ……太いいっ」

小さな体が俺の下で甘くささやく。見上げる瞳がせつなそうに誘惑して、甘く絡みつく小さな肉壺がチンポを歓迎する。

「ふひひ、ホシノちゃんのおまんこは狭いねえ」

「ふああ……♥ だつてえ、太さんのがあ……んっくっくっ……太すぎるとですっ」

俺のものになったデカパイをムニムニ揉みしだく。幸せそうな笑顔がどうしようもなくみだらで俺の腰が無意識に深くえぐる。その腰の動きに無意識に合わせて体をくねらせるくるホシノちゃん。

「はっ……あっくっくっ♥♥ んっくっくっ」





クチュクチュめつた音を響かせながらホシノちゃんが気持ちよそくに答える。すっかり俺に取り憑かれてるってわけだ。就職のために股を開いたその上昇志向で今度は俺のためにたっぷりエッチなことを覚えてね。

「はっ♥ はっ♥ はっ♥ 太さんとお仕事おおおお♥」

恍惚と繰り返しながら裏返った快感の声を響かせる。

「ホシノちゃんにはデザイン会社より下着モデルの派遣とかがいいと思うんだよね」

パチユンパチユンと勢いよくチンポで肉壁を味わいながら優しく語りかけてやる。

「あっ、んん♥ 下着モデル…ですかあああ♥」

「うんうん。下の階に派遣の会社があるからね、まずはインターン。それから正規採用で頑張りなよ」

ふひひ、正規採用っていうか性器採用だけだね。この体で営業したら絶対人気出ることに間違い無しの人材だよ。

「ひゃあい！ わたしい、頑張りますうう♥ んん  
んんんん♥」









昼間投げかけられた言葉をそのままぶつける。シキナに座られてセットした髪はぐちゃぐちゃに乱れ、上下に舌を動かし続けるイケメン。

「あーいうふうにはなりたくないよな。アレ一生クソマゾ奴隷だね、ふひひひ」

ぐつと頭をつかんでチンポを維持して一気に引き出す。優秀なホシノちゃんは空気を読んでクスクスいう。

「もーそっついう風に言っちゃだめなんですよー」

俺のザーメンまみれの顔にチンポをペチペチはたきつけられながらクスクスと昼間の笑顔でわらう。やっぱ「イツかわいいね。ホシノちゃん見つけたとこだけはあのクソマゾ優秀だったかもね、しらんけど。」

「ふひひ、じゃーうちでチンポ啜えながら書類チェックしてね」

「はい、よろしくお願いします ♡」

うんうん、新人は元気が一番だね！ゆるふわマン  
コな新人でしばらく楽しめそうだ。まっ、しばらくは悪口の反省として清掃員してもらおうけどね。





翌朝。始発前。Neo Avant-garde Design Inc.の扉の前にホシノちゃんが立っている。きちんとシャワーを浴びてメイクし直して完璧な装いだ。会社の上司の机に辞表願いと会社の鍵を置いてくる。そしておもむろにハサミでズボンの股間に切れ目を入れる。下着は着ていない。さつき髪とおそろいの色に染め直した陰毛にソープをまぶして泡立てるとハンドルを磨き始める。

「ん…ふう♥ 丁寧に磨かなくちや」

錦ホシノはインターンの最初の一週間は四十路清掃株式会社に派遣されてMCビルディングの清掃と塩豚太のソーププレイに務めることになったのだ。清掃には向かないしゃれた靴で背伸びして一生懸命ドアハンドルを陰毛で磨き上げる。始発が動き出す頃にはペントハウスに戻って昨晚のプレイで汚れた室内をきれいにしなければならぬ。太社長は寝ちゃったからその間に部屋を掃除して、新しく配置された浴室で待機しながらスマホでソーププレイの教材を見る研修を受けなければいけない。

初日からハードだけと太さんにお仕事いただけるなんてうれしい。一生懸命頑張って今後に繋がなくちや。さつきく頂いたMCリクルートのインターンメニューはソーププレイの研修からビジネススマナーまでぎゅちりスケジュールが組まれていてかなりきつそうだけど、何事もはじめが肝心なんだから。

「んん…これからちよつときつそうだけとお…、太さまのご指導いただけるんだから、頑張らなきゃ」

下着モデルの仕事に適正があるなんて思ったことがなかったけど、太さんに言われた時、直感的に転職だと思った。前の会社のことはすっかり忘れてエッチな体作りにつとめないよ。

そう思うと自然とハンドルを磨く腰使いにも力が入る。最後にソープで泡立ったハンドルをお気に入りのカーディガンで拭く。お気に入りの春コーデも今ではなんとなく地味で自分には似合わない気がする。これからはもっとセクシーでエロティックなコーデを選ばないと。

## 一ヶ月後

錦ホシノが塩豚太に遭遇してから一ヶ月がたった。OJTを兼ねたインターン期間が終わり、正式にMCCリクルートに入社することになった。

「失礼します」

屋上のペントハウスの扉をくぐる。バツチリメイクして一ヶ月前と同様の洒落た出で立ちの錦ホシノだった。ただ違うのは当時と違ってカーディガンを羽織って



おらず薄いシャツ越しにブラが透けている。薄いシャツも下乳のあたりに切れ込みが入れられており、アダルトイナティストが強化されている。ふわふわの七部丈のパンツスーツも透けており、黒いパンティが外からでもよく見える。サテン生地的光沢のあるブラパンティセットはホシノのお気に入りだ。

いつも通り場違いな作業服で社長椅子に座る塩豚太。

高いヒールのサンダルでモデル歩きしながら下着を見せつける。恥ずかしさはない。下着モデルなのだからいつでも商品を展示するのが仕事だ。下着が隠れる服は選べない。

「錦ホシノ、お陰様で無事インターンを卒業できました。正式の契約書類をお持ちいたしましたので確認お願い致します」

「あー、久しぶりだね」

最近顔を見ていないと思つたら完全に存在を忘れてたよ。ソーププレイさせてエロ下着モデルに派遣してたことまでは覚えてただけだね。

「じゃ、書類ついでに」

その指摘通りホシノは手がらだった。

「はい、「いちご」になります」

モデル歩きのままターンする。透けたシャツ越しにパンティの後ろに挟まれた封筒が見える。

「へー、じゃあもらっつね」

意図を察してニヤニヤ鼻の下を伸ばしながらさういう。

「はい、よろしくお願ひします」

嬉しそうに俺の腕の中に入ってくるホシノ。相変わらず小柄だからだ抱き地抜群だ。ギュッと抱きしめたら初めてあったときより甘いフェロモンが鼻をくすぐる。個人別にフェロモンの量を計測し体臭が気にならない程度でフェロモンが最大化されるようにシャワーの頻度が調整されているためだ。

淡い色合いのリップがそつと俺の厚ぼつたい唇に重なる。俺好みのレモンカードのエッセンスと精力剤を配合した特別なルージュだ。





膝を着いてベルトに手をかける。胸元にハート型のQRコードがタトゥーが彫られている。MC済みの商品の証だ。

「うわあ、立派ですねー！」

取引先のオフィスを褒めるかのように前のめりでグロテスクな肉勃起を褒めるホシノちゃん。笑顔が眩しいね。

「ふう。楽しんでくださいね」

丁寧に春色のマニキュアに彩られた指が赤黒い肉勃起を扱き上げる。

「へーホシノちゃん下のマンションに入るんだ。高くない？」

「シキナさんに勧められましたから。それに新人の間は二十四時間待機できたほうがいいからっつ」

MCビルディングの上層階には居住用のスペースがある。都心ということもあつ



て月十万のワンルームだが、うちの社員たちには人気だ。

「試用期間中は最低賃金なのでちょっときついですけど、こうしてご主人様に直接ご指導いただけますしね。」

「あ、こっぴたいします」

そう言いながら優しく彼女のシャツの下乳のスリットに俺のチンポを導く。ふにふにと柔らかい双乳の谷間に挿入される肉棒。柔らかさと暖かさ、そして丁寧に先走りをまぶされてまるで温められたおしぼりに包まれているような感触だ。

「楽になっちゃってくださいわね」

そう言いつつ彼女がテーパードパンツのスリットから指を入れる。

「あ…んんっ」

せつなそうな顔をしながら腰を浮かせる。

「んんっ、ローションを使わせていただきますね」

ホシノちゃんはなんとパンツと膣の中でパイズリ用のローションを温めてくれていたのだ。

ホカホカの人肌に集められたローションがとろとろと乳の間から覗く俺の亀頭にかかる。まるでケーキをホイップで飾り付けるような楽しそうな表情でパイブリの準備をする。

「んっ…♡ ふうっっ、とっつてもエッチですよ♡」

そう甘く言いながらグニグニとおっぱいをもみしだいてローションを行き渡らせる。薄く透けたシャツにランジェリーと素肌が張り付いてすごくエロい。そしてニチャニチャとめめった膨らみで包み込むようにしながらパイブリス始めるホシノちゃん。視線はずっと俺の方を見て、反応を観察している。

飼い主のご機嫌を伺う飼い犬みたいな従順さで。卑猥な格好も今どきのファッションと組み合わせているせいでどこかおしゃれにすら感じる。そしてそんな普通なら絶対縁のない女の心を込めた奉仕を堪能する作業着姿の中年オヤジ。まったくMCビルディングは最高だね。

「んっふう♡ ご主人さまの、お、おちんぼ様たくましいですうっ♡」

ふうつと吹きかける息が亀頭をくすぐってエッチだ。

「深夜は四十路清掃で元職場の清掃、  
昼間は元職場に派遣、夜はランジェリー





ーパンティタイプのセクシーモデルなんだ。元の職場に派遣されるのって気まずくないっつう」

「んんっ…♥シキナさんがあ、説明に行つてくだつたんですよ。んんっ…」

ーチャニチャと音を立てながら乳を揺らすと、おっぱいが吸い付くようにチンポを包み込んでくる。

「以前よりもお、人件費少ないですし、普通に昼間働いていたほうが夜の仕事のブランド力も上がるんですってえ…んんっ。あ、お口でも気持ちよくなせてもらいますね」

そつ言いながら透明な唾液をとるところと赤黒い俺のチンポに垂らし、一生懸命亀頭に向かってチロチロと舌先を伸ばす。ぎゅっつとのおっぱいを沈み込ませながら尿道口をピンクの舌がちらちら刺激する。時折じゃまになるウェーブのかかった髪をかきあげる仕草がたまらない。

「ちゅっ…んんっ…ふうう、それにい、前の会社でも配置転換させてもらいましたから…んんっ大丈夫です♥」

優しく微笑んでそついう。昼間働いているおしゃれなデザイン事務所の新人。それがこんな顔で積極的にパイズリしてくるとは思いもしないだろう。

又チヨ又チヨと先走りとローションと彼女の涎の混じつたヌレヌレのチンポをオッパイでしごく速度が徐々に上がる。摩擦で卑猥なミックスローションがさらに温かくなり、きもちいい。快感のボルテージが上がっていく。



「はっ♥♥はっ♥♥はっ♥♥」

ちよつと狂気じみたことをいいながらニチャニチャと甘い笑顔でパイズリしてくる。

「いつでもイってくだオって構いませんからね♥♥ちゅちゅちゅ…」

彼女の息も上がる。

その熱い息があたつてオちちにチンポにクル。

真つ昼間からきつちりとおしゃれに着飾つた新人のパイズリ。昼の太陽に煌めく体液。ムレムレのメスのフェロモンに包まれて絞られる。

「ん…イクぞおおー！」

いい匂いのする髪に包まれたホシノちゃんの頭をつかんでチンポに擦り付ける。気取つたオチナをザーメンで汚す優越感に打ち震えながら「ビュルルっとおもいきり吐き出す。

「ふーよかったよお」

手を話すとファンデーションの上にザーメンを重ねられたホシノちゃんが上目遣いで声をかけてくれる。

「満足してくだらうって私も嬉しいです。いつでも気が向いた時にお呼びくだらうね」

彼女の契約書にサインする。

「控えは今がよろしいでしょうか、それとも夜のほうが都合がよろしいでしょうか」

ザーメンまみれの顔が嬉しそうに俺に聞く。

「フヒツ、じゃあ次はホシノちゃんの営業を見せてもらおうかな」

「はい、承知しました」

そう言いながら軽く顔に飛び散ったザーメンを拭って舌でなめあげる。妖艶な動きだ。そのうえで、俺をソファに座らせると自分も隣に座る。キャバクラみただ。

「私は錦ホシノと申します。ぜひ、おちんぼホシノのホシノとおぼえてください  
ね」



そう言いながら密着してへる。キャバクラではありえないような積極的なサービス。

「エロティックドレスはまだできたばかりの会社ですが、男性のための女性下着をテーマにしているんですよ」  
おっぱいを押し付けてくる。先程パイズリで出されたザーメンが谷間でにちゃにちゃと泡立つ。

「このショーツについてもかわいいですよね？手触りも確かめてくださいませんかあ」

淡い色のリップの唇がそう言う。ゆっくりと見せるようにリボンベルトをほどぎ、透けていたショーツを露出させる。密着しながら俺の指をショーツに誘導する。

「触る方の手触りに配慮してサラサラの生地なんです。それに、吸水性に優れていて、濡れたらすぐわかっちゃうんですよ」

あざといほどに誘いかける口調でそうオオヤク。たしかに薄いショーツには線状のシミが広がっていて、彼女が発情しているのが丸見えだった。

サラサラとした生地に触れる。

「っんあうう…」

クチクチと湿った感覚とともに艶めかしい吐息が聞こえる。



俺がずつぷりと突き刺す中も営業トークをやめない。俺を潤んだ目で見上げながら、切なげに快感の声を上げながら、

「じゃまじい…あつあつぷっ♡なりませんん♡」

潤んだメスの目で見上げながらも片手ではショーツを示し、宣伝する。あくまでも主役は下着であって彼女はモデルであり営業のオンナでしかない。そういう卑屈な謙虚さが伝わってくるような販売姿勢だ。

その一方で淫らにも湿りきったオンナの部分は暖かくチンポを包み込み、商品を汚す熱い愛液をあふれるほどにほじほじする。

「はっ…ああああ、お客様のぉ…太いいいっー」

「いっいっいっどすうううーんあつはあああーんっくっぶううう」

洒落た衣類が汗と二人の興奮した液体のシミで汚れる。でも、汚れば汚れるほどに興奮してますます腰を激しく降ってしまう。以前なら絶対俺を相手にしなかったような意識高いオンナが媚びて、ヨガって、マンコを差し出してっる。

洒落た服が汚れて、キラキラのアクセサリが腰をふるたびに揺れる。









「マンコに貼り付ければ、ちゃんと蓋にもなるんです。ザーメンはこぼれずちゃんと受け止められるように何度も試行錯誤したんですよ。大切なザーメンをこぼさない、エッチのじゃまにならない、可愛くセクシーに体を彩る最高の下着はどつですかあぁっ？」

証明するようにクイッククイッと腰をふって見せる。乱れた服。ドロドロの下着。瀟洒なファッションは見る影もなく淫らなシミに汚されている。それにもかかわらず自信満々で腰をカクカクふる彼女はまるでまだ足りないとおアピールしているビッチみだ。

「プライドもなにも全て俺好みに変えられたメス。最初にあつたときのみ力つくホシノはもはやどこにもいないことは明らかだった。」

「フヒヒ。まだもう少し試したいな。今度はお尻のなで心地とかね」

「はい、承知しました」

そうやって尻を突き出す。完全に調教済みのメスだ。



# Hentai Moojisan

愛されボディは  
こうして作れ！  
最新、エロかわ  
ストレッチ特集

愛される膣の作り方  
マントレ、膣トレ

人気の  
キャバ嬢コードを  
ビジネスに活かす！

現役ジム  
インスト  
ラクター

強気な態度、  
だけど本当は  
犯されたがり！



二：トレーニングジムイクメン系営業女性編 綺羅星リサナ



「たまには運動でもしたらどうなの？」

ソファの上で缶ビール片手に漫画を読んでいるとシキナが仕事しながら声をかけてくる。

「いい、そんなだろ」「よしよしなよ。」「どうも毎日二時間はビルの清掃行ってるし結構頑張ってる方じゃないかな」

「もう、それだっただきたい途中で飽きて帰ってくるじゃないの」

パソコンから目をあげずにシキナがそういう。まったく俺のオシナの癖にカーチャンみたいなことをいいやがって。犯すぞゴルアと心のなかで毒っく。

「まーいいじゃん。別に」

「そう言うって思っただけのジムの方に営業を頼んどいたよ」

「なんだよ、だるいな」

「そう言わずに下着べらいい着なわい」

「くくく」

そう言いながら立ち上がって床に転がっていたバスローブを取り上げる。最近仕事の時以外はバスローブが普段着になりつつある。羽織るだけでいいからお手軽なんだよね。

「まったくしかたないんだから」

そついいながらバスローブの紐を結んでくれるシキナ。なんだかんだ言いながらやっぱりコイツはいいオンナだ。

「それじゃあ、呼ぶね」

シキナがインターフォンに向かってなにか言う。オートロックが解除される音がして、普段聞き慣れた革靴やハイヒールとは違う足音が聞こえてくる。

「コンッコンッコンとやや強めにノックされ、「失礼します」とハスキーな声が聞こえる。」

「今日はお問い合わせありがとうございます」

入ってきたのは長身で筋肉質なミディアムショートの女だった。シキナよりも高いから一八〇センチくらいありそうだった。

ラフに羽織ったジャケット。清潔感のあるカットソー。下半身はかなりぴっちり目のズボンのようなスパッツのような感じの服だ。そして、スニーカーというあまりウチの女たちが履かない靴を履いている。全体的にラフな格好だというのにごこか受け入れてしまつのは彼女のビジュアルが、ハスキーボイスと相まってなかなか整っているからかもしれない。

名刺を差し出してきたのをシキナが静止する。



「今回説明をお願いしたいのはこちらの方です」

そういつて来客用の隣接スペースに案内する。完全にシキナのことをこの部屋の主だと思っていた彼女は示された俺の方を見て『ひっ』と小さな声を上げる。明らかに嫌悪とパニックの混じった表情が一瞬浮かぶ。

当然だ。視界の外に明らかに小汚いデブでこま塩頭の中年男がバスローブだけ羽織って座っていたんだから。

「弊社社長の塩豚です」

シキナがニヤニヤしながら名刺を差し出す。衝撃に固まってしまったそのイケメン女はぎこちない様子でそれを受け取る。

「あ、すみません。失礼しました」

切り替えたのか表情を営業スマイルに戻して、こっちに来る。シキナが後ろから声をかける。

「リサナさん、楽しんでくださいいね」

ちらつと視線を合わせるシキナ。明らかに『準備完了』です。楽しんでくださいいね』というメッセージだ。

「今日はお話を聞いてくれてありがとうございます」

シルバーフィットネスのパーソナルトレーナー兼営業部長の綺羅星リサナです」

「こっちに向き直ると俺の目を見て自己紹介してくる。まったくコイツも自信満々かよ。かすかに香る甘いメスのフェロモンに鼻をくぐらませながら心のなかで毒づく。

一瞬の間。俺が自己紹介しないと気がついたりリサナは持ってきたカバンからチラシとかを出し始める。

「塩豚さんは健康について心配してるからジムの詳細を聞きたいって聞いたんだけど、どんなことを心配してるのかな」

俺の自己紹介がなかったことから苛立ちを隠さなくなったリサナ。少し棘のある言い方だ。

「んん、別に俺は気にしてないんだけどね。シキナが勝手に呼びやがって」

そう言いながら今日二缶目のビールを開ける。プシュツという爽やかな音とともに幸せのホップの香りが広がる。だつてのに目の前の女は眉をひそめてやがる。

「まあ、たしかに周囲の人間が心配になるのもよく分かるよ。だつてその体型じゃあね。まっ、昼間っからビールを飲んでるんだからそうなるのも当然だけどね。特にビールはお酒の中でも極端に糖質が高いしプリン体の含有量も多い。そんな体の敵を飲むくらいなら水でも飲んでたほうかマシなんじゃないかな」

うぜええええ。小賢しいことをあれこれいいやがって。人の体型をそんなにあげつらうんじゃないよ。

「失礼だけど、体重身長などをここに書いてくれないかな」

本当に失礼だな。

「いや、あ……いらんないところか……」

「ロ」もりながら拒否しようとする俺。

「「こちらに記入済みのものを用意しておきました」

シキナが割り込んできて差し出す。くっさ、コイツに調子に乗る材料を与えるんじゃないよ。

「あ、ありがとうございます」

しかもシキナに対しては敬語なんだな、コイツ。できるオンナには敬語とか苛立たしい。オンナのくせに。イライラする俺をニツコニコな笑顔でこっちを盗み見てくるシキナに気がついてイライラがさらに溜まる。コイツ帰りのエレベーターの中で犬になる催眠かけてやるから覚えてろよ。

「あー、これはかなりヤバいね。今すぐ心筋梗塞で死んでもおかしくないレベルじゃないか。高血圧、肥満体、それに血糖値は危険水域。さらに不規則な睡眠に食事はジャンクフードばかり。毎日五本以上の飲酒にタバコ。やめられないんだったら死んだほうがいいんじゃないかな」

「イツ！くそ、今すぐ殺したいレベルだろ。年下のくせに偉そうにあれこれいいやがって。お前に関係ある」とじゃねえだろうが。

「いや、別にもう気にしてないというか…。見ないでくださいというか…」

催眠の設定をシキナがしたせいでもうなってるかわからねえし。くそっ。

「しかもその無精髭。まともに肌のケアもしてないんだろっし、備考欄にいいオンナとやりまくりたいって書いてあるけど、行動と言動が噛み合っていないだよ。あと、さっきから口が臭いし」

余計なお世話だったの。女の癖に小癩な！



苛立ちのままに隣に座っていたリナサをつかもつとする。なんだかんだ言っても「イツ抵抗できないように調整」されてるんだろう。

と思ったが、即座に俺の手は払われる。

「ホラ、鍛えてないからだよ。君みたいな古臭いおっさんは女だったら無理やり押し倒せばやれるとか思ってるんじゃないかな。最低だね。軽蔑しかないよ」

見下すような、憐れむような目で睨まれる。そしてそのままリナサの手が俺の肩をつかむ。とっさに払おうとするが、固くて全然解けない。

「これは話を聞いてくれた特典の縄跳びだよ」

そう言つて俺の手を紐で縛る。トヤ顔が一気に滑稽に映る。つまり、強い女に逆レイプされる、そういう趣向なわけだ。

「トレーニングの必要性がわかるまでレイプして犯さなきゃね」

抵抗してみせると嬉しそうに煽ってくる。笑いを堪えるのがきついね。

「ん？その程度なのかな？男サマの癖に。ちょっとは鍛えなよ。じゃないと…」

更に力が入って俺の体をソファに押し倒す。高身長で筋肉質なだけあって余裕で俺のことを制圧してくる。きつと催眠のことを知らなければ恐怖だったろう。だけど、分かっているからお笑い草ではない。

「キミが犯される前にボクがキミを犯しちゃおうよ」

俺をソファに押し付けながら乗っかってくる。整ったボーイッシュな顔が自信満々に俺のことを見下しながら、サディステックに笑う。片手で俺のことを押さえつけながらも片方の手でズボンを脱ぎ去り、スポーツパンツ越しにマンコを俺のチンポに擦り付けてくる。

「ホラ、弱いと思ってた女にレイプされちゃうんだよー朝からジョギングしてムレムレのパンツを擦り付けられるの気持ち悪いだろうっ?」

グリグリとコットンのスポーツパンツが俺の竿に押し付けられる。本人は嫌がらせしているつもりなのか意地悪な笑みを浮かべていて、それがさらにシチュエーションの変態具合を際立たせている。しかも彼女の言葉によってリナサの体からかすかに香る甘い匂いの正体もわかる。



なるほど、そついう趣向か。

グニグニと押し付けられる割れ目。パンティ越しでも感じられるほど熱い。

「まったく、レイプされてるくせに固くなってきてるじゃないか。ヘンタイなのかな?」

フンとわらって見せながら腰を浮かせて半勃起したちんこの亀頭にスポーツパンティをこすりつける。敏感な亀頭に「ロットン」のザラザラした感触が激しい刺激になる。

「ウロロ、やめよう、ロト」

口だけで抵抗して見せるとリナサは更に興奮したのか、俺の亀頭の上で激しく腰を前後に振る。まるで発情したオス猿だ。徐々に俺の先走りと彼女の愛液でパンティが濡れてニチャニチャと音を立て始める。

「ほら、もっと頑張つて抵抗しないと犯されちゃうよーキミが下に見ていた女にチンポを啜えこまれてギョッギョッて絞られちゃうよ。好きでもない相手にザーメン奪われて最悪だろ?」

ふひひ、完全にこ褒美なんだよな。むしろ早くそうしろや。トレーニングマニアの強いオナナにだらしない中年男のザーメンでマーキングしてやるからな。

「ほーら、もうガチガチに勃起しちゃってるじゃん。全身隅々までだらしないくせにチンポだけは鍛えちゃって、どんだけ風俗通いしたのかな？ まっ、そのチンポもボクの鍛えられたマン」で情けなく「キュッ」「ユ」しちゃうんだけどね」

上機嫌で俺のことを逆レイプしながら片手でパンティをずらす。ぴっちり閉じたオナナの場所を俺のチンポに向かってグリグリと落としてくる。

「んんっ、こんなのオナニーと変わらないよね。年下の女に押しえつけられて肉バイブ扱いされるのは最低の気持ちなんじゃない？ ま、絶対やめてあげないけどね」

生暖かいラブジュース亀頭にかかると。

そのままぴっちり閉じた肉の割れ目がチンポに向かって押し付けられ、徐々に亀頭を包み込んでくる。

「んん、…ふう…太いねえ…んふう…」

思わず彼女の本音が漏れる。キュツとしまつて熱い割れ目が俺のガチガチチンポをゆ





つくりと飲み込んでいく。ミチミチと愛液をかき混ぜながら上位の女の内側へ侵略していく俺の男の部分。

俺のチンポを包み込みながら、リサナは熱くて狭くて、ニチャニチャと音を立てながら上下に腰をふる。俺の「ことを見下している表情は腹立たしいが強気な女がワケも分からず自分から腰を振るのは愉悦だ。さっきは知った風なことを言っていたが、何も知らずに逆レイプしてくるヤコマは完全にバカ女そのものだ。

「ホラ、いいんだろ？」

あつふう…おつ、女に好きにヤれちゃってええ…チンポ固くしちゃうの屈辱だろ？」

んっふうっ、んっ動くとっ……いいんだろ？っふうっ

グリグリと押し付けてくる。ヌルヌルと愛液が飛び散る。引き締まった体が扇情的に俺の上でくねる。鍛えられた筋肉も、よく手入れされた健康的な体も今や俺を興奮させるスパイスでしかない。

「ふう……ふう……ふ、太いねえ……ふう。

き、キモチイイよ……ふう……んっふうっ

少しずつ腰を振る速度を上げてく。

「んんっ、キミもおお、いいんだよね？」

チンポじいいてえ…強制的に気持ちよくくっつけてあげるからねーんっあっつっかっつっ……屈辱的だっっ」

パチュンパチュンとリズムカルに腰をふりはじめるリサナ。積極的な割にはまだ足りないね、フビツ。ここは年上の本当の男の魅力ってやつを教えてあげなきゃね。

腰を落としてきたタイミングを見計らってズンツと思いつきり一気に突き上げてやる。むっちりと搾り取るように絡みついてくるマン肉の一番奥に強引に亀頭を打ち込む。

「んんっつっうっ!!、なっ生意気なチンポのくせにっ…」

不意を疲れた逆襲に慌てて快感を隠そうとはじめるリサナ。今度は逆に俺がニヤニヤしながら更に追い打ちをかけてやる。たった一瞬の反撃でリサナの余裕が崩れ去ってしまう。

「ひっ、ひぎゅっ…っ、こんなあ…ダサイおっちゃんのおお…くせにっ…」

唇を噛んで耐えようとするリサナ。だが、傍目にもわかるほどの焦りを隠そうとするイケメン女子サマ。





「んっ…ふっ…んんんん」

一生懸命こらえるリサナ。そんな彼女の背後に腕組みしながらニヤニヤしているシキナがいた。

「スペシャルコーチなんですよ？ご主人様より腰振るのが遅くなってるなんて職務怠慢じゃないか。『スペシャルコーチ』らしくちゃんとガンガン腰を振らなきゃ」

その言葉とともに落ちかけていたペースが一気に回復する。だが、声を押し殺せないことから彼女の意志とは無関係なのはあきらかだ。命令されて意志とは無関係に腰を振らされてるから声も我慢できなくなったってわけだ。

「んあっ…あっふうう…あっくううう！」

ひゃあっ…あっ…はあっ…あああっ…んふううう  
「うう」

なるほど、それが催眠のキーワードってわけだ。ふひひ、こっからはこっちのターンだよ。

タイミングを合わせながらズンツと思いつき腰を突き上げる。





主導権を握った興奮から固くなつた俺のチンポに貫かれたりサナが惨めな喘ぎ声を出す。グツチユグツチユとリズムカルにイッた直後のほぐれたマンコをがつつりかき回してやる。

「ひゃっ…やめっ…」

んんっ、デブオヤジのおお…くっくせにっ…！

ほっ、おふおおおおおー！

悔しさをにじませ体をのけぞらせてヨガるアスリートボディ。完全にぜい肉つきまくりのおっさんにあっさり負けてやがる。

『スペシャルコーチ』なんだからイッた回数ぐらゐ自分でカウントしなよ」

「ひゃっ…あっぴょおおっ…やっ、三回目イッてるっ…っ…」

肢体を反り返らせてチンポにたやすくイカされるぞ！トレーナー、リサナ。





「んっけゅっっっっっっっんーだっっっっっっ…メなのこいっ…」

もうなにいつてるのかわからないね。オラオラ、いい加減負けを認めなよ、うひひ。

「おっ「おおおー！」「腰がああっ、勝手に動へっっっっ…っへっっっっ…」

グイングイン激しくグラインドしながらケツフリとかマジエロい。ヤバすぎんだろ。ロデオマシンに乗ってるみたいに激しく腰を上下に動かすたびにニチャニチャと滑った音が響き、パシヤパシヤと生暖かい液体が飛び散る。誰がどう見てもイキまくって正体をなくしているリサナはザコだった。

「らっひっへっっっっっーらめええええー！」「これえ、ラメなのおおおーほっん「おっおおお」

「うひひ、そろそろ俺もイキそっだよ。当然中出しだよな。リサナちゃんが俺の事レイプしてるんだから。お望み通り汚い中年ザーメンをたっぷりあげるよ、ふひっ」

「やっ、やめっ…んろおおおおおおー」







なるほど。ザーマンがトリガーになってたわけだ。中出しされて敗北することで、体育会系的な上下関係が刻み込まれたってところかな。俺にはかなわないってね。

「まったく、トレーニングが必要なのはリサナのほうじゃないか」

「うん、スコア一対五でボクの完敗だよ。こんなにザコマンコだったなんて…」

大きな体を一生懸命縮めて上目遣いで俺を覗き込むイケメントレーナー。ギャップ萌えてやっなのかな、案外かわいいじゃんと思ってしまう。

「いいこと思いついた。ふひっ、これからは俺がりサナのマンコ」をトレーニングしてあげるよ。しかもタダで」

「えーっ本当にーぜひお願いしたいよ」

「いいよ、じゃっ、まずは散タリサナちゃん」

「エロ汁で汚れた俺の下半身を掃除してよ」

そう指摘してやると焦ったように申し訳無  
クマッに謝る。

「…あ……い、い、い」



ゆっくりと俺のチンポをぐちゅぐちゅに滑ったマン」から引き抜く。

「んっ……んっっっ」

せつなそうに卑屈な声を上げてでかい体が起き上がっていく。

「全裸になつてね」

その俺の命令にも「わかったよ」と素直に従い、そのまま服を全部ぬぎやる。

そして再び体を縮めて俺の股ぐらの間に潜り込んでくる。

「んっっっ……これがさっきまで入ってたんだね……」

ゆっくりと半勃起状態のチンポがリサナの生暖かい口に吸い込まれていく。

そのとき、シキナが満足したような顔をしながら割り込んできた。

「リサナさん、『スペシャルトレーニングメンテナンスモード』」

次の瞬間、電源を切ったようにリサナの目から光が消える。

「お疲れ様、どうだったかな？トレーニングは」

「あー、いいところまで切るなよ」

俺の抗議を無視してシキナが言葉を続ける。

「でも、この小憎たらしいメスをメタクチャにしたいんだよね？」

「まったく、よくわかってるじゃん。ふひっ、さすが俺の女だ」

「ご主人様のためにおもちゃを用意するのも私の仕事だからね。」

ほら、ご主人様の下半身をその汚い布切れで丁寧に拭きな」

そう言つて脱ぎ捨てられたリサナのジャケットトを指差す。

機械的な動きでそれを取り上げて俺のムレムレの金玉の後ろを拭き始める。



意識がないほうが整った顔立ちが彫刻みたいで、より強調される。そして、そのかっこいい女がブランド物のジャケットでザー汁まみれの下半身を拭いている。興奮しないほうが難しい。

「リサナさん、初めてあった時はこの人をどう思いましたか？」

「いやいや俺みたいな笑顔を浮かべながらそう尋ねるシキナ。

「キもちわるい。常識がない変質者……」

まあ、そうだろうな。

「今はどうかしら。たつぷりイカされてザーメンもらったよね」

わざとリサナの髪の毛を撫で回して乱れさせながらシキナがそう聞いた。まるでペットの犬をなでてるみたいだ。

「強くて、かっこいい。尊敬してる……。でも、健康が心配……」

シキナがこっちを見る。それを前が言わせてるんじゃないよな？

気まずくて話題を帰るために別のことを聞く。

「うん、リサナちゃんは彼氏とかいるの？」

「うん…、同じ会社の同期の「ウスケ。大学時代から一緒に暮らしてる」

おい、「コイツナラう」と聞いていない情報も出入れてきやがった。そういうリサナちゃんには罰をあげなきゃね。

「へー、同棲してるんだ。じゃっ、リサナちゃんは今日から下のMCリクルートの寮に引っ越してね。ザ「ママン」鍛えるんならわざわざ通勤時間かけて出勤する時間とかないからね、ハッピビ」

まっ、本当はいつでも呼び出せるオナホとして俺の「レクシヨン」に加えてやっってことなんだけどね。

「はい…寮に引っ越します…」

一瞬眉を寄せるも、すぐに無表情に戻って復唱する。

「あとはリサナさんにはMCリクルートに入社してもらおうよ。今の会社にはMCリクルートからの派遣社員ってことで残ってもらおうけどね」



シキナが口を挟む。相変わらず「イッえげつない」とをオラつと提案してくる。俺も人のこと言えないけど、ね、フビッ。

「MCリクルートの…派遣社員になります」

残酷な暗示を受け入れるリサナ。

よくよく見るとまつげ長いし、女っぽいでこがすげーエロい。

無造作に髪をすくい上げて匂いをかぐ。汗のはずなのにシトラスっぽい匂いがする気がする。

「フビッ、リサナちゃん、これからはもっとチンポに媚びることを勉強しようね」

「チンポに…」びる…」

光のない整った瞳と形の良い唇が無機質に受け入れる。

「リサナさんって女の子にもてるよね？」

シキナがリサナの頭をつかんで上を向かせながら聞く。

「…はご…」

空虚な瞳が俺たち二人を見上げながらそういう。

「ふふ、思ったとおりだよ。でもいままでチャホヤされてきたリサナさんはウソのリサナさんだったのよ。本当のリサナさんは踏みつけられたいマゾ犬なのよ」

「ウソの…ボク…?」

「あなたはいじめられればいじめられるほど相手が好きになるの」

「いじめられれば…いじめられるほど…すき…なる…」

繰り返すイケメン顔に向かってシキナがペツと唾を吐く。

「なめなさい」

頬にたれた唾を色素濃いめのリサナの舌がすくい取る。

「こんなところかな。ご主人さま、なんかあるかな?」

忠犬シキナがこつちをみる。





「そうだな。リサナちゃん、俺の言うことは絶対正しいからな。考える前に従えよ、アツ」

「せつたい、…た…だし…い…」

ゆづくりとそう繰り返すのを確認してからシキナが言う。

『スペシャルトレーニングメンテナンスモードエンド』

はっと驚いた顔をして目を覚ます。混乱した表情が最初のイリつく感じと真逆で可愛くなっている。めたくくななな。

「そんじゃ、今日一日全裸土下座の刑ね。ザロマンコのくせに俺のこと見下したんだから当然だよな」

「はー」

よくわからないまま土下座し始めるデカ女。なかなか面白い見ものだ。

「このMCリクルートの契約書にサインしてね。あと、この社員教育資料を読み上げて今日中に暗記しなさい」

「え…はー…」

土下座した体勢で無造作に渡された紙を受け取るリサナ。書類をわたしながらシキナがニヤニヤしながらアイコンタクトで今日は全力で『新人いじめするよ』と伝えてくる。

土下座してMCCリクルートの教育資料を差し出した状態で床に膝をついているリサナ。つい一時間前までの鼻息荒い感じがかげらもない。

「んんんっ…」

俺が背中に腰掛けるとそんなうめき声が聞こえる。小声で覚えるために新人教育資料を読んでいる。

「MCCリクルートの社員は家族やパートナーよりもご主人さまを愛します。男性器は女性にとっていちばん大切なもので男性器がついている男性は相手にかかわらず敬います。男性の序列は男性器のサイズで決まります…」

いつのまにかシキナがたたんだらしいスーツと社員証が隣に置かれてさらにリサナの惨めさを際立たせている。

「まっ、今日は暗記するために定時ではあがれないわね。終電が過ぎたらテストしてあげるね」



サラッと言うツシキナにリサナがキツとにらむ。ただ、その瞳の奥には怒りだけではない媚びた甘ったるい感情が含まれていた。

数日後

「太さん、今日もトレーニングの時間だよ」

そう言うって嬉しそうにリサナが近づいてくる。最初の汚いものでも見るような表情はかけらもない。

白いトレーニングウェアが眩しい。しかも、インナーもガードも付けていないせいで乳首が透けている。その上白いトレーニングウェアに手書きで彼女自身を貶めるようなメモが書き込まれている。右乳首には『↑超でンカン』、クリトリスには『↑ガチ弱点♡』、マンコには『ザンマンコ』↓』といった具合だ。

「ふひひ、仕方がないなあ、付き合っただけでやるか」

「太さんじゃないとお願ひできないんだ。よろしくお願ひするよ。」

「じゃあ、まずは今日のトレーニングレコードを確認させてもらうかな」

そう言いながら引き締まった腹筋を指差す。そこには今日の彼女のメモが書かれていた。

Risanao+22

182cm 66kg

カナル 07:15 12:40 14:12

ルヒナ 12:50

「ちつトレは朝出勤前と昼休み、あとジムでのコーチング中に発情して一回やっちゃったんだ。フェイトレの方は今日は昼休みにバナナでやっただけだね。最低毎日三回やるからって指導してもさっしやるのさっしっしてておもしろかったよ」



腫トレってのは確かオナニーだ。フェラトレはフェラの練習だったか。大真面目にオナニーとフェラ練習の報告してきて、できなかつた言い訳までするイケメン女子(笑)。

「うっひっ、だめじゃないか。せつかく時間作るために引越したのにその程度のトレーニングもできないなんてね」

「いやあ、面目ないよ」

「うっ、彼の方は最近ちゃんとトレーニングしてるの?」

リナサは会社の同期の男と付き合っていて、しかも同棲していた。まったくどういってもこいつも恋愛脳かよ。

当然リナサは階下のMCリクルートの社員寮に引っ越させて、運悪く彼女をオレに盗られた残念彼氏くんにはリナサに遅漏化トレーニングをさせている。

「うん、今日も朝一でキツめのハンドジヨブを二セットしてコックプレスにロックしたよ」

要は普通のセックスで再現不能な強さで握って手コキした後には貞操帯に突っ込んで鍵をかけたことだ。まったく彼氏くんカワイソーだね、フヒヒ。

ちなみにフェエラの練習をさせてるのは、リナサにはエロトレーナーとして客のチンポを啜えさせているからだ。

「もー、そんな事より早くトレーニング始めない?」

もともとエロかったのかすっかりセックス中毒になりつつあるリサナが近づいてきて俺を抱きしめる。柔らかなデカ乳が俺の胸に押しつぶされ、トレーニングパンツ越しにチンポにマンコを押し付けてくるのがマジでエロい。完全に性のケダモノと化している。スポーツやってると性欲強くなんのかな。

「今日もボクのザコマンコ鍛えてくれ」

ずりずりとマン汁のシミが徐々に広がっていくあるマンコをトレーニングパンツ越しに円を書くように押し付けてくる。若いオナナのフェエラモンたっぴの汗の匂いに包まれるとチンポは否応なしに硬くいきり立つ。

そのままリサナは俺を抱きしめた状態で器用にポケットから出した精力剤の粉末を開けて口に含んだ。



「んん…ぢゅりゅ…んちゅっ、がらがらあ〜」

口の中で精力剤を唾液と混ぜ合わせて、そして俺より身長が高い彼女が俺の唇を上から奪っ

「んちゅっ、ちゅっ…ちゅぶぶぶぶ」

精力剤をオシナの唾液でよくシイクしたセックスのためだけの特製ドリンクってわけだ。

「ぢゅぶぶぶぶぶ…」

強く抱きしめながら舌を差し込んで精力剤を俺の口の中に押し込んできた。くねくねと俺の口の中で卑屈に這い回る舌が心地よくてチンポが硬くなっていき、その硬くなったチンポに柔らかなトレーニングパンツ越しのモリマンが押し付けられる。時々クりに引っかかってリサナの体がピクピク震えるのも楽しい。

「んんっ…んんっ…」

鼻息を荒くしながら俺を離す。透けたトレーニングウェア越しに乳首が勃起しているのがよく見える。

「あああ…やっはあ…♡今日もボクのザ「マン」を太さんのデカマラで鍛えてよ♡

まずはスタンディングフロントを何本かよろしくね」





スタンディングフロントってなんだっけ…と思っていたらリサナが再び抱きしめてくる。今度は彼女の指がトレーニングパンツの裂け目を広げている。いつでもハメれるように男モノのパンツみたいに目立たない穴を付けたトレーニングウェアだ。シルバーフィットネスで普通に販売させている。リサナのファンのメス共が何も考えずに買うからね。

「んっんっんっ♡」

そのまま勃った状態で反り返った俺のチンポを飲み込んでいく。つまりスタンディングフロントって横文字でそれっぽく言ってるがただの対面立位だ。

「やっぱり、んっんっん…太さんのきついっいっ…」

密着しながら艶めいた口調でそういう。俺よりでかくて強いイケメン女が俺のチンポのポジションに合わせて膝を折りつつチンポを受け止めるのは優越感以外の何物でもない。体格でも筋力でも学歴でもコミュニケーション力でもすべて俺が勝てないブランドメスが自分から股をひらいて嬉しそうに甘えてくる。

「んっんっん、いっちぢいっいっ…」

膝を曲げながら腰を落とす。

「んっんっんっ♡」

そして屈伸するように伸ばす。完全に全自動肉オナホの拳動だ。バカなりサナはトレーニングだと思ってるけど。

「あっっほおお、いっちちちいっ♡」

俺のチンポの形に広がったイケメン王子様マンコがキュッキュッと甘く絡みつく。

「じっじっじっ♡」

快感にイケメン顔を歪めながらトロトロ腰をふる。これは活を入れてやらなきゃね。

彼女のペースを無視して俺はズンツーンと腰を打ち付けてそのまま子宮口をグリグリ押しつづぐ。

「んぴょっおーっほおおおおおー！」

変な声を上げながらガクガク快樂に震えるリサナ。本当にザコマンコだ。オナニーさせまくってイキ癖をつけてやってるから最近さらにザコになってきてる。そのうちチンポ入れられただけで絶頂する弱々マンコに仕上がるだろ。





「そっ、そっなんだあーだってオト」にはああ、はっふうう、勝てないいい♡勝てないんだああー！

まっ、マン♡がぁ♡ザ♡、ザ♡だからあぁ

キュンキュンとマン肉を震わせながら俺を抱きしめる。初めてあった時にあんなに俺を見下していたくせに今では無意識に俺のチンポに子宮口をあわせてグリグリされたがるマゾ便器に成り下がってしまった。

「お、っくおおお…っほおおおー！」

惨めなほど舌を突き出してアクメりながらも一生懸命立ち続けようとするリサナ。今まで女子にもてまわっていたらしいけど、この顔を見たらどんな女もドン引きじゃないかな。それとも羨ましくて股開くかな？

「いっくら♡♡♡いっくらあぁあ、まっ、デカチ

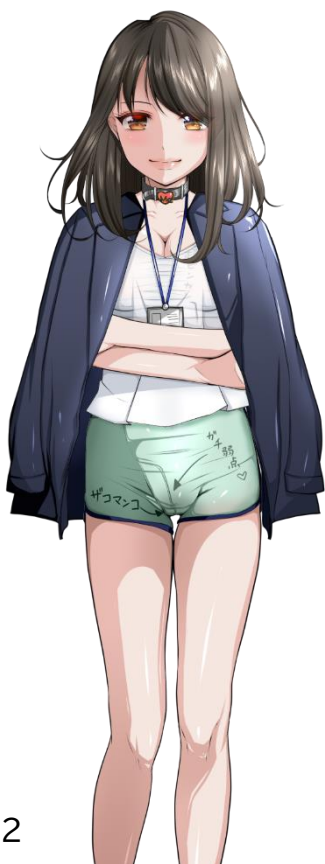
ンポンいいい…んぴよおお…ザ♡マン♡お

お、小突き回されてえ、イッちやっつらあぁあ

あ……」

鍛えられたボディも、よがり狂いながら

悶えてたら型なしだね。



「ひよおっ、お♡ザ」「マン」「お、かれないいい♡♡デカチンポ」かれないいいいいいいー」

巨体で俺を包み込むように深く抱きしめながら絶頂するリサナ。オナナの筋肉がビクンビクンッと快感に反り返るように震える。そして鍛えられたアスリートの膂肉がうねるように俺を包み込む。

「おいおい、また勝手にいったの？ザ」すげえね、

「んっふううっ……ごめん……んんう……なっいいいいっ」

「おう、全く仕方ないね。マンスププレスで鍛えてあげるから準備しなよ」

ぬぼんつとチンポを抜く。まだ一発も出せてないせいでバキバキに勃起したまんまだ。

「ああっ、はああ、ふっふっふっ」

リサナはせつなそうに喘ぎながら最近応接室に追加した首枷にふうふうと体重をかける。ガチャンつと手錠の要領で首枷が締まる。

「ふっふっ……んふっふっ……よろしくっお願ひすね、ね」

そのまま彼女は「しちちを見ながら所定の場所に足を置く。首同様に両足が固定される。

リンボードダンスで極端に低いバーを潜ろうとする姿勢とでも言えばいいだろうか。膝をおってマンコを突き出した姿勢だ。下半身を高く突き出した状態で首と両足を固定する。恐ろしく屈辱的な姿勢だが、リサナはトレーニングだと信じている。

「びびび、じゃっ、一発めっぐぐ」

突き出したリサナの両手を掴んで全体重をかけて上方方向に向けられたマンコにチンポを勢いよく押し込む。

「んびよっつっほおおおおーおおっほおおお」

何度目かの理性のかけらもない淫らな奇声を発しながら絶頂するアスリートマンコ。パタパタと吹き出した潮が床に水たまりをつくる。

だが、この体勢で固定しているのはザコマンコがどれだけイヤっても遠慮なく俺が腰を振れるからだ。マンズプレスの名前の通りデカ女でも固定されてしまえばチンポを突き刺されるだけの存在になってしまう。

「びびびっ、うっ、マンコへのせこ偉そっつにっ

やがつてー」





「今日も、リサナの負けだな、フヒッ」

そう言いながらチンポをグリグリ押し込む。

「んぐっひゃああああー！しょうらああああー負けえええ！

ボクのおおお、負け♡負け♡なのおおおお！

ち、んぽ♡にいいいかれにいいいい♡♡ザ「マンコ」なにょおお♡♡♡♡

絶頂することで反り返った体はさらに無理やり股間をオレに押し付けてくる。まるで鍛えられた子宮が四十九路デブチンポに求愛のダンスを踊ってるみたいだ。

「おおおおおーおっほっおっっー」

絞るようにチンポをコキ上げるリサナのバキュームキン肉マンコについて俺のチンポがイカされる。絶対受け入れるはずがなかった上級マンコに俺の二億匹の劣等精子が吐き出される。負け癖の付いたザ「マンコ」卵子が今頃俺





の精子に小突き回されてますます喜んでる」じやうじやう。

「あつ、ひゅうあああ……ありがうじやう……、んぷうじやうじやう」♡♡♡

中出しザーメンに礼を言うリサナ。

「ぷう……。悪くなかったけど、日に日に弱くなってるんじゃない？ マズソトレーナーさんよお？」

キツキツマンコで限界まで絞られて力が抜けきったチンポをズルズルとぬく。

「ひゃあつ、……あつ♡んん……うってえ、かれないんらからあ……」

息も絶え絶えのリサナの顔にまん汁とザーメンでどろどろになったチンポをのつける。

「んちゅ……ちゅるるる……んぷう、ぷう、太さんがあ、ぢゅぶぶぶぶぶ……つよすぎりゆからあ……♡♡」

リサナが金玉の汚れを吸い上げながら言う。トレーニングの後はシャワーだけど、リサナの場合バキュームクリーニングだ。

今までずっと体育会系で鍛えてきた肺活量を使ってシワの一筋一筋まで吸い上げ、汚れを吸い取る。俺はその間ケータイを見ながら適当に時間を潰す。洗車機のように全自動でタマもサオも磨き上げる。

そして最後に顔の上についた汚れを拭って全て口の中に運ぶ。チンゲもチンカスも恥垢もだ。

「オトコのエネルギーいただきます♡」

イケメン声が似つかわしくもない挨拶とともにゴクリと飲み込み、げっふーつと汚いゲップを漏らす。教育とおりのマゾマンコにどんどん変わっていくのが最近地味に楽しい。

隠しきれない笑いを漏らしながら彼女の腕のスマートウォッチをチエックする。万歩計モードになって彼女の体が揺れた回数、つまりは俺が腰を振った回数が記録されている。そしてリサナのトレーニングでは俺の腰振りは一回十円となっている。

「ふひひ、もう五千パンパンしたんだね、リサナちゃん」

「うん。ありがとうーでも、もっと太さんに鍛えてほしいな♡」

嬉しそうに微笑むイケメンスマイル。イラストときてチンポで顔をビタンとぶって隣のソファに座る。またやりたくなるまでの間リサナはソファの隣の人間テーブルとして頑張ってもらおう。



ちょっといい位置感に固定されているせいで隣のソファでぐろぐろする時に読みかけの漫画や飲み物を置くのにもいい。もちろん、リサナの上に座ってアナルを舐めさせながら別の女にチンポを啜えさせるのにもちょっといいポジションだ。鍛えているせいで乱暴に扱っても罪悪感ないのが最高だしね、ふひっ。

翌日、起きてみるとリサナが出るとこだった。シキナが拘束を外してやったらいい。身支度をと整えてできるオンナモードのリサナだ。だけど「いつはもう以前の偉そうにしていたイケメン女子じゃない。

「あ、太さん、昨日はたくさんオト」のエネルギー分けてくれてありがとう♡

身をかがめて俺を抱きしめてくるメスだ。できるオンナというよりヤレるオンナってとこだね。

「あんっ…♡」

ケツをもんでやるぞと甘えた声を出しやがる。澄ました顔してるが、今だってマンコは冴えない中年ザーメンでタップアップのくせに。

「太さんにもっと鍛えてもらうために頑張ってるね」

そう言って犬のように笑うイケメン女子。せいぜい俺のために稼いで、貢いで、そのうちエロボディも売ってくれ。客のジム通いの若い女も犯しがいいがそうだ。そう思っただけで勃起するのはこのエロメスがマンコを擦り付けてきているからでもあぬ。

「じゃっ、行っつてね」

甘くキスして、小走りで出勤する。昨日あんなに犯してやったのに……。バカみたいな体力だ。

